

全球独占ニュース：中国第 13 次 5 ヶ年計画と宇宙軍の創設

漢和防務評論 20150805 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国は、第 13 次 5 ヶ年計画期間（2016-2020）に正式に宇宙軍を建設する計画があるようです。

中国は過去に何度も衛星破壊実験を行っており、その目的は、弾道ミサイル迎撃実験の隠れ蓑にするためであったということです。またレーザー兵器を搭載した衛星攻撃衛星を開発し日米の偵察衛星を破壊しようとしています。

KDR フランクフルト特電：

中国軍の権威ある消息筋は、本誌に対し、現在中国は宇宙軍建設計画を推進中である、と述べた。同消息筋によると：中国は、第 13 次 5 ヶ年計画（2016-2020）において、正式に宇宙軍を建設し、宇宙からの早期警戒、大陸間弾道ミサイル迎撃及び対衛星攻撃能力を強化する。

消息筋は、組織機構について次のように述べた：宇宙軍建設の初期段階においては、総参謀部がリーダーとなり、空軍に担当させる方式を採る。組織が成熟した後は、空軍に所属させる。このため多くの先進装備の開発が必要だ。第一に、X バンドの大型フェーズド・アレイ・レーダーを開発する。この計画は、すでに第 12 次 5 ヶ年計画で正式に事業化され、第 13 次 5 ヶ年計画期間に建設される、と。この情報は、外部世界が初めて入手した情報である。中国空軍はすでに大型 X バンドレーダーの開発を事業化しているという。現在この種レーダーの主要な開発国家は、米国である。

”中国空軍は、2030 年までに新型の航空宇宙軍部隊を建設する”。

また中国は、第 13 次 5 ヶ年計画期間中に、弾道ミサイル早期警戒衛星を打ち上げる予定である。このシステムは、2 つの軌道を飛行する 5 個前後の弾道ミサイル早期警戒衛星により、来襲する主として米国の大陸間弾道ミサイルを探知する。20 乃至 30 分の対処時間を得ることができる。

中国は、なぜ衛星を攻撃するのか？消息筋は次のように述べた：中国軍は、現在までに何度も衛星破壊実験を行った。實際上、同様に試験したのは大陸間弾道ミサイルを迎撃する能力である。中国は、国際政治の圧力を回避するために衛星を攻撃する方式を選択したのだ”と。また現在すでに事業化されたものに、レーザー武器による衛星攻撃技術研究がある。研究は順調であり、第 13 次 5 ヶ年計画期間に完成できる。同時期に”レーザー武器試験部隊”を建設する。同部隊の主な任務は、レーザー武器をもって低軌道衛星の機能を妨害する試験である、と述べた。消息筋は、

米国及び日本の偵察衛星による対中国偵察能力を特に強調した。
このことは、中国が衛星攻撃兵器を開発する目的は、米国或いは日本だけを対象にしているのではないことを意味する。

また消息筋は、開発試験中の 3 種類の迎撃弾の実験状況に就いて述べた。改修された **HQ-9** シリーズ地対空ミサイルは、大気圏内、20 乃至 30 **KM** の弾道ミサイルを迎撃する能力がある。また中国は、大気圏内で、60 **KM** の迎撃能力があるミサイルを開発中である。大気圏外の迎撃弾は距離 100**KM** に達する。防御区域は半径 100 乃至 200**KM** である。

現在、3 層の迎撃システムをテスト中の国は、米国とイスラエルだけである。上述の消息によれば、中国もまた大気圏内外の 3 層での迎撃システムを開発中であることがわかる。

したがって **KDR** は次のように判断する：中国軍は、大陸間弾道ミサイル迎撃能力をテストするため、近い時期に何度も衛星攻撃実験を行う可能性が極めて高い。今後 6 年、宇宙の軍備競争はさらに激化する可能性がある、と。

以上